

聖戰四週年記念日に於て

専門部長 正井敬次 敬次

七月七日の支那事變記念日に際しては、國民一般に宮城遙拜と皇軍將士の英靈に對する默禱の禮式を行つて、事變四週年記念日の感銘を深くしたのであるが、この日、心ある國民の胸に湧いた感じは、一様に次の如きであつたと思はれる。即ち、事變は早や四年を経過した、上御一人に於かせられての御軫念のほど眞に畏れおほき限りである、皇軍將士の勞苦のほど實に感謝の至りである、併し東亞新秩序建設といふ聖戰目的の完遂は未だしと云はねばならぬが故に、吾々國民に於ては國家總動員といふことの意義を一層深く認識して、而して銃後奉公の道に進まなければならぬ、と。

蓋し支那事變は今日にてはもはや單なる支那事變ではなくなつてゐる、事變は龜の一層重大なる局面を含む所の事變となつて居ると云はねばならぬ。即ち、いまや我國は世界新秩序の建設に關して重要な役割を果さなければならぬのである、其方面の事業の完遂によつて初めて東亞新秩序の建設を遂行し得る、と云ふ情勢の下に立つことになつてゐる。この際この難局に對する國民の覺悟は元より充分であると考へる。即ち、國家總動員法の發動が一層強力迅速に行はれ、人と物と資金に關する計畫經濟の實行が急を要するに至つた今日の情勢下に於て國民に於ける總力應召の覺悟は立派に出來て居ると考へる。併しながら、この超非常時に於ては、從來の支那事變下に於て用意せられた覺悟よりも更に重大なる決意を必要とするに至つたことは、之を否み得ないのである。

Table of contents for the journal issue, listing articles and their authors.

わが國民に獨得の國家的精神があると云ふこと、それは言を俟たぬ。併しこの精神發揚に關しては、從來國家的指導者に於て種々の運動を行ふことが必要であつた。即ち、事變の初期には國民精神總動員の運動が行はれ、後には翼賛會の創設による新體制の運動が行はれることになつたのであるが、これ等の運動に於て、「滅私奉公」「公益優先」「一億一心」と云ふが如き標語が、國民に於ける國家的精神の發揚を刺戟するための言葉として用ひられたことは、一般に知られる通りである。併しながら滅私奉公其他の標語は實は寧ろ消極的の意味をもつた言葉である、それ等は國民からして公的精神を引き出すための訓練の言葉である。眞に事變のこの四年間は國民訓練の時期であつたと云つてよい、國民は指導者の運動に從つて受動的に生活の行動をとつたと云つてよい、然るに今日は如何なる時期であるか。今日はもはや國民各自が受動的消極的ではなく能動的積極的なる心持に於て總ての生活を行ふべき時ではないであらうか。

事變四週年の記念日は國民の新しい決意の記念日でなければならぬ。如何なるを新しき決意と云ふかといふに、實は別に新しきことではなく、其は各人が國家を背負つて居る一億人の一人であること云ふは、一人位がどうあらうとも支障がなからうと云ふ結果を生む。それではあけないのであつて、各人が各自に國家を背負つて居ると云ふ氣概を持たねばならぬ。例へば一億一心と云ふ言葉であるが、それは訓練せらるゝ國民に對する言葉であつて、今日にては國民はそれ以上の心持を用意せなければならぬ。國家の心と國民全體の心を各人が一身に於て持つと云ふ、「一身一億心」とも云ふべき決意と氣概、それが今日の國民に要望せられなければならない。以上聊か事變記念日に於ける感想を披瀝して之を諸賢並に諸生に懇える次第である。

低物價政策と生産力擴充策 (講演要約)

經濟學博士 谷口吉彦

經濟新體制の目標は生産力擴充、即ち高度國防國家の完成のための生産力擴充にある。それに關して今日一の問題がある。即ち演題に掲げてゐる生産力の擴充と低物價政策との關係であつて、兩者は矛盾するのではないかといふのである。これは經濟理論的にも興味ある課題である、生産力擴充は目的であつて低物價政策は手段である。これは現在の戰時經濟、國防國家建設には生産力擴充が目標であるから、交換、配給の方便としての低物價政策は二義的なものになる。だから生産力擴充と低物價政策との何れに重點を置くかとすれば寧ろ低物價政策は捨て、生産力擴充の方を生かさねばならない。

然し生産力擴充にのみ重點を置く低物價政策を採らぬとすればどうなるかといふに、第一次大戰に於ては獨逸は價格政策を放任したのでその物價高は三倍となつてゐる。同様に日本もこの事變初には三倍になつてゐた。

生産力擴充と低物價政策との關係は低物價策を採つてゐる故、生産力擴充が阻害されるといふ事になつてゐるが、交換の理論上御承知の様に物價高に對する生産増加及びその反對の場合としての價格機構は即ち數量對價格は反比例するものである。國內で産業が股賑となれば物の價格は下落し、物は價格が騰れば増加し廉價となれば物は少くなるといふのは自由經濟の理論である。これが順調ならば問題はないが現状はその通りでないで、現在は物價は高く而も品不足の有様である。

この原因はといへば先づ考へられる事は三つある

る。その一は原料不足で品物が少いのとその二は實金統制によつて利潤率の高い産業であつても平和的産業への投資が自由でない。又三として輸入が爲替關係上杜絶してゐるなどある。今までであればこの物資不足に對しては價格が暴騰したが現在は(1)、(2)などの價格統制によつてそうでない。だから價格的に數量は動かさないので價格機構は完全に作用してゐないのである。

現在でも價が廉いから品物が不足するのだといふ人が多い。特に大阪人に見られる様である。生産力擴充のためには低物價政策を緩和せよといふ聲がある。その例を米にとつて説明すれば米の増産をはかるに米の價格を上げよといふ説がある。

然し現在では米の價格を上げる事によつて米の増産は出來ないので、米の増産の進まないのは肥料や勞働力の不足などによるのである。その對策としては勞働力、肥料などの安價供給が考へられる。物資の不足するのは低物價による利潤薄や赤字などのためではなくて低物價政策と云つても生産費の上に一定の利潤を加へてあるから赤字などもあり得ないのである。現在の公定價格にもそういうものがあつて、原價計算により嚴密な生産費の按出があつてその上に一定率の利潤が加へられてゐる。現實の問題として物資不足は公定價格の偏倚にあるので(3)のあるものは利潤少なく、ないものは利潤が多いので利潤の多いものが多く作られるのは當然である。その上(4)は普通見なれたものから制定されるので一層物の不足が感ぜられるのである。

これは結局低物價政策の偏在によつて生ずるもので完

全な低物價政策が行はれば物の不足はあり得ない事になる。

茲で生産力擴充に就いて云へば、一定の價格に於て生産を増加せしめる事は統制經濟、計畫經濟の行ふべきものである。然し生産力擴充といつても全てのものがあり得ないが先づ生産力擴充の内容をなすものには(一)軍需品と(二)生活財の二がある。(一)は最大限に擴充するもので(二)は最小限に生産力を維持すれば足りる。だから奢侈贅澤は許されないで戰時に於ては當然の事である云へる。

吾々の考へるのは生活財であつて軍需品の事はわからない。そこに社會人の考へに矛盾がある。生活財の場合は低物價政策と關係なく統制せられてゐるもので低物價を廢しても數量的に多くはならない。

今云ふ通り生産力擴充の目標は軍需品であるが現状は條件的に圓滑に進まない。これは米の場合と同様で原材料の不足を來たしてゐる。然しこれは初めに生産力擴充が誤つてゐたので、初め總花的に生産力擴充を行はしめた即ち軍需工場に一律に擴充したので各所に未成品の堆積が出來上つて結局品不足となつたので低物價政策が阻害したのではないといふ事は茲にも云ひ得られるのである。

先程云つた様に現在は低物價政策を緩和せよといふ聲が高いが、これを廢止した所で今云つた通り物資不足はやはり續くものと思はれる。戰時經濟に於てはあくまで低物價政策を堅持すべきであると思ふが、現在一部での低物價政策廢止の問題に因んで例の九・一八價格停止令の存廢が今日の一問題となつてゐる。

例のストップア令に關しては一昨年九月以來吾々の委員會はゼネラル・ストップを主張して來た、そして九月十八日に實施せられ一年間の期限を切つて、その後所謂(5)を作る事になつたが、その後聞もな

く政府で煙草・米、米炭などを値上げしたので關取引の助成ともなり(9)決定が立ちおくれ、初めの一年間は効果があまり現れなかつた。それで昨年九月一日延長を命じたが、然し本年その期限が切れるのでこれを延ばすとすれば政府の威信にも拘はるといふのである。

一方(10)の決定せられたものは商工省で五萬、地方を併せれば十萬程の物に就いて決定されたのであるが商品の数がわからないので價格停止を解くといふ事は容易でない。商品の多種類であるといふ例に、農林省が木材の分類を東京で験べたら百三十萬、名古屋で八〇萬種となつたので、幾等あるかわからなかつた。これ程に商品の数は何千萬あるかわからないのである。今こゝで停止令を撤回すれば現在(11)のは暴騰すると豫想される。

現在のところ(12)は纖維品が多く、金屬品、化學製品は殆ど(13)である。(14)と(15)とは相關的な關係にあるもので(16)が廢止されれば必然的に(17)も上る。(18)廢止の聲を聞いて買溜をやる、品不足するといふ事になるので殆ど金屬である軍需品調辦に支障來す事となり(19)廢止は考へられない。それは初め一年と期限を切つたのが拙かつたのでストップは當分の間と云ふこととして置けば問題はなかつたのである。

又價格政策上現在のものは凹凸があると考へられる。(20)は後に出来る程高くなり、(21)は(22)よりも少し高い。又(23)自身の内にも高低がある。だから價格の凸のところを製造すれば儲かるし凹のものはあまり儲らない。それで凸のものを多く製造するので物資が偏在する。この凹凸を是正しなければならぬ。

それならば何を標準として決定し是正するかといへばやはり標準生産費に標準利潤を加へたものでなければならぬ。そうして價格の凹凸をならせねばならぬが

現在はその收拾が出来ない程である。而も現在の價格政策ではもう力が足りないので出直さねばならぬなつてゐる。而も現在は殆ど全てが現金買賣であるので非常に通貨が膨脹してゐる。今日巨額に増大してゐる購買力と物資不均衡との關係から物價政策は再出發しなければならぬ。言葉をかへれば價格政策から一般物價政策となるのである。といふのは總體的に物價を考へねばならないのでそれには購買力を抑制し吸収しなければならぬ。私は不景氣のどん底にあつた昭和七年頃購買力補給策を提唱したが、今日では反對に購買力の吸収を考へなければならぬ。そのためには租稅による貯蓄によると二方法が考へられる。

日本は租稅は一番少なく、豫算の三分の一程度で、英獨の豫算半額に對して少ないのである。然し租稅はもう手一ぱいで「人間は租稅を納めるものなり」といふ様な形になつて來てゐる。租稅をこれ以上取るといつても、收益を全部取上げることになつては、人間は働く興味を失つてしまふかも知れない。

もう一つの方法は貯蓄で、處によれば強制せられてゐる。東京では給料の通帳拂が考へられ問題となつた。これは現金通貨の多數流通の抑制策として考へられるがこの現金通貨の多數流通といふのはインフレを起しやす。然し現在日本では悪性インフレは起り得ないと見られてゐるが、悪性インフレは紙幣インフレであるから現金通貨の増加も悪いので、茲で信用取引の復活が考へられる。その一つとして先程の通帳制が考へられるが、これは帳簿上の振替で事が済む。だから何もかも小切手で済む。勿論不渡が多くなる事も考へられるが……とも角何らかの方法で購買力を吸収しなければならぬ。悪性インフレ防止といつても物價騰貴を防ぐので此處でも低物價策が考へられる。

生産力擴充に就いて云へば、今までは總生産力の擴充であつて先程云つた總花式のものになつて行きつまつてしまふ。そこで私は現代説へてゐる單位生産力の擴充を云つて來たが、今までは能率といふ言葉で云はれてゐた。然しこれとは少し異なるので、單位生産力の擴充には勞働力に就いても擴充が考へられる。

神戸のあるゴム工場でゴム原料一噸から自轉車タイヤ五千本を従來造つてゐたのが、研究の結果八倍の四萬本を生産することが出来る様になつた。實際の問題として如何うされるかは私は知らないが、これなどは單位生産力の擴充である。現在は原料、勞働力、施設共に不足の状態にあるので、生産擴充に就いてこの場合考へねばならぬのは單位生産力である。

茲で自由經濟時代の景氣變動の理論を見て見ると、總生産力對單位生産力の關係は反比例する。即ち總生産力が最大のときは有らゆる方法が取られるので單位生産力は最小となり、反對に總生産力が最小のときは全ての機構が收縮されるので單位生産力は最大となるのである。今日の統制經濟の時代にあつてはこれは矛盾でこの兩者の關係は比例の立場に置かれる。

現實の場合軍需生産は單位生産力は最小で、その反對に平和産業は最大である。そこで今日能率増進が再び取り上げられて來てゐる。これは單位生産力の擴充を云ふもので、やはり今日の生産力擴充を云ふものでやはり今日の生産力擴充の問題も轉換期にあるといへる。

だから私の考へとしては低物價政策も生産力擴充の問題も共に轉換期にあると思ふのである。

本講演は去六月二十七日關西大學校友會主催の下部天六學舎で行はれたもの要約で文責は編輯部にあつたことを附言します。

大阪の古代文化に就いて

(講 演)

鴻池合資會社理事 江崎 政 忠

私、御紹介に預りました江崎でございます。唯今も御紹介戴きましたやうに、私は實業界に在つて、相當いろ／＼な事業を引受けて、忙しき身でありまして、實は本日お話申上げること、何かよく取纏めて申上げればいゝのですが、つひ暇がありませんので、支離滅裂な話になると思つて居ります、お聴き苦しい點はお許し願ひます。

大阪と淀川の關係

日本の最初の文化といふものは、皆大阪を通じて入つたものだと言つて居るものです。この大阪といふものと、淀川といふものがどういふ關係があるかといふと、淀川があつて始めて大阪が出来たので、若し淀川といふものがなかつたならば今日の大阪は出来なかつたし、又日本の文化といふものは、大阪を通じて今日のやうに入つて来ることは出来なかつたものであるといふことを堅く信じて居ります。といふ譯で、大阪といふ土地は歴史以前のことは分らないとしても、歴史以後のことから見ても、淀川の持つて参りました土砂で以つて、大阪の土地の約八割以上のものが出来た、若し淀川がなければ大阪の土地といふものは出来なかつた、といふことになる。それから海外から入つて来る文化といふものも皆大阪から入つた。どういふ譯でどういふ順序で入つたかを、これからお話を致します。先づ貴方がたにお考へ願ひたいのは、何れの國もさうですが、日本も、天子様のお出でになる都といふものは、どこでも文化の中心となつて居ります。處が、神武天皇様が天和の橿原に都をお定めになつてから既に二千六百年、神武天皇が大和に都をお定めになつてから、明治天皇様が明治二年に都を東京にお移しに

なるまでの千五百有餘年の間、日本の帝都はどこにやつたかといふと、淀川流域であつたといつても決して間違ひないのであります。大和地方にもあり、河内にもあり、永く京都にもお出でになりました。

海外からいろ／＼文化が入つて参りましたが、日本は初め、まだそれ程開けなかつたから、支那の特使を通じて昨んに文化といふものが採入れましたが、その入つて来るのは、必ず大阪を通じて入つた、即ち淀川流域であつた。必ず船は淀川に入つて来たといふことは動かない證據があります。

難波の芦の由來

も一つ、私の専門の山林からもよく分つて居ることは、文化の開けた地方といふものは、一番先が山林が荒されるのであります。どういふ譯かといふと、文化の集る所、即ち人が澤山集りますから、いろ／＼なことをして行く必要上から、山にある木を切る。それで家を建てる、薪炭にも造らなければならぬといふ風に澤山の木を切る、それがため山が荒れる、それがため雨が降ると土砂がドン／＼流れるから、その土砂が溜つてデルタが澤山出来る。それが積り積つて大阪といふものが出来て来た。それで、よく私申すのであります、大阪のマークは「みをつくし」を用ひて居りますが、「みをつくし」は何であるかといふと、今日の言葉でいへば航路標識です。船の通る道を知らせる處の航路標識が「みをつくし」です。デルタが出来て、そこに一面芦が生える、これが難波の芦です、この「難波の芦」「みをつくし」といふ言葉は平安朝時代に出來た言葉で、この言葉は萬葉にはありませんが、古今集

などの澤山の勅撰歌集を見ますと「みをつくし」とか「難波の芦」といふものを讀んだ歌が何百首あるか分りません。皆標お馴染の百人一首の中にも「難波江の芦のかり簾の一夜故身を盡してや戀渡るべき」難波がた短かきあしの節の間もあはで此の世を過してよとや」詠ねれば今は同じ浪連なるみを盡しても逢んとぞ思ふ」といふ三百も「みをつくし」「難波の芦」を讀んで居ります。

先程も申しましたやうに、土砂がどん／＼流れて来て、従つて大阪といふ所にデルターが出来、その度に水路が變るから、みをつくしを立て、目標としたのであります。百人一首の中にも「和田原八十島かけて漕出ぬと人には告よ海士の釣り舟」八十島といふのは澤山の島といふことで、これは大阪のことを唄つた歌です。

地形の變動

かういふ風に文化が進むにつれてだん／＼土砂を流し、その土砂が積つて大阪といふものをつくつて来たこれは云ふまでもないことであります、足利時代になつて、昔から大阪の都といふものは津でありまして神功皇后以來出入りされた所であり、足利時代になるといふと相當明廻りと交通があつたに拘らず、大阪は淀川の流域のため土砂が積つて大きな船が入らない、そこで堺港といふものを用ひられた。處が天保年間大和川を唯今の所に附替へたので、大和川の持つて来る土砂のため堺港が潰れてしまつた。それで堺港は淺くなつて遂に港の用をなさないやうになり、今日の右様になつた。

序でながら申上げて置きますが、今天保山といふものがあります。天保山の出来たのはどういふ譯かといふと、淀川の土砂の詰つたものが天保年間に安治川を浚へ、その土を彼處へ持つて行つた、それが天保山です、さうしてあの附近に今でも四貫島とか、江子島と

かといふ名がありますが、昔は島であります。

そこで、神武天皇が初めて兵庫の驛から此方の方にお出でになり、さうして大和にお入りになるといふ時分に、お船をお附けになつた難波の岬は何處であるかといふと、御承知の如く、紀元二千六百年奉祝宮の仕事を致しましてその場所といふものが顯著されました。それは何處であるかといふと、北區の天満宮の社内に決りまして立派な碑が出来ました。あなた方は一寸變に思召しませうと思ひますが、あの邊の所が適當であると思ひます。これは後に、孝徳天皇の長柄の宮といふものに關係がありますから申上げて置きますが元々、仁徳天皇は元難波高津宮といふものをお定めになつたのは何處であるか、かういふことは歴史家に於て十分研究されて随分議論もありましたが、仁徳天皇の高津宮の後は唯今の大阪城であるといふことだけは總ての歴史家の説が一致して居ります。それは日本書紀に、仁徳天皇が大宮の下の方に堀江を掘られて、溝である水を海の方にお流しになつたといふことが書いてあります、即ち堀川をお掘りになつたといふことは、唯今の天満川といふものが難波の堀江であるといふことも歴史家の總てが一致して居る説であります。

難波の岬と堀江

地質學者が十分調べた處によりますと、大阪城の高臺から天満の方に掛て層が同じであります。さうして見るといふと、山の上に、神武天皇さんはお上りになるといふことはないから、岬の低い所に船をお着けになつたといふ風に考へますと、難波の岬といふものが今の天神さんの境内だらうといふことは私間違ひないと思ひます。昔の學者は詳しいことが研究出来て居りませんから、随分間違つたことを云つて居ります。例へば、仁徳天皇さんの高津宮の後は、唯今の高津中學の傍に洗心洞文庫があります、彼處の附近が高津宮の跡だといふことになつて碑が立つて居ります

が、あれは非常な間違です。日本書紀に大宮の北の方の難波の堀江を、仁徳天皇さんがお掘りになつたといふ記事を見ましても、唯今の空堀が、仁徳天皇さんがお掘りになつた堀江の跡だといふ説もありません。佛教が入つて来た時蘇我稲目と物部尾與と喧嘩して佛像を難波の堀江に投じた。この難波の堀江は何處であるかといふことに就てはいろ／＼説をなすのであります。天満川の難波の堀江は佛教の入りつて来た支那口であるといふ處から、追返すといふ意味でこゝへ放り込んだといふことも、これも疑ひの餘地がないのであります。

盾津、日下江といふ所に、二千六百年顯著奉祝宮の事業として碑が出来ますが、あの邊が上陸地點で、そこへ船をお止めになり、長髓彦から攻撃された時分に、船をお停めになつて盾を以つてお防ぎになつた、それで盾の津、この場所が顯著されたのであります。ですから、神武天皇の時代には唯今の石切の下の目下の下に至るまで入江が入つて居つた、そこで船で行かれたのであります。その名残りとして唯今も残つて居ります九ヶ池は、周圍八町からある池であります。これが當時の入江の名残りです。

神功皇后様が三韓征伐に行かれて凱旋なすつた時分も、やはり難波の津に御上陸になつた。それから三韓が日本に貢物を持つて参ります時難波の津に上つて居ります。さういふ譯で海外から新しく入つて来た處の文化といふものは皆大阪から、又その子孫は止つて居りましたからして、大阪の文化が發達したといふことも偶然ではないといふことがお分りになることと思ひます。

四天王寺と高津の宮

それから皆様御承知のやうに、聖徳太子さんが四天王寺をお建てになりましたが、これはどういふ目的であつたかといふと、四天王寺をお建てになつたのは所謂大阪が文化の中心地であるといふ點と、一つは對

外的に、一つは對内的な目的からで、對外的といふと外國の者は先づ大阪に入るんですから、大阪に立派な寺を建て、外國から攻めて来た時に防ぐといふ考へもあり、又味方を護るといふ意味で建てられたもので、外の寺と四天王寺は違つて居るのであります。それはどう違つて居るかといふと、外の寺には、寺の眞ん中に阿彌陀さんが四角に立つて居られますが、四天王寺のは、皆西の方を向いて立つて居られる。即ち聖徳太子の社は、外國から来るものを防ぐといふためにお建てになつたといふことで四天王寺の配置を見ても分ります。それから社會施設を一番初めになすつたのは四天王寺でありまして、敬田院、施藥院、療病院、悲田院といふものがあり、藥を施すとか、教育をするといふたにお建てになつたのであります。その當時文化の中心地である大阪をお選びになつた譯であります。

先程申しましたやうに、高津の宮は大阪城の附近であります。よく繪に船場の方を御覽になつて居られる繪がありますが、あれは河内の方を御覽になつて、民の窟の煙の少いのを見て三年の間年貢をお免じになつたので、あの時分船場は海であります。河内の方を御覽になつたといふことを間違ひないやうに願ひます。それから、孝徳天皇の有名な長柄御殿の宮、これは日本文化の上に非常に重大な關係があります。大化の新政は大阪の地に於て、孝徳天皇様が御發表になつたもので、それもこの學校のある長柄です。どの邊かといふことは大きな都であり、相當廣い場所ですが、天満天神の附近からこの邊にかけてだらうといふ説がどうもいゝやうです。兎に角日本の國の上に大改革が行はれ、新しい大化の新政といふものが大阪に於て御發表になつたといふことは我々忘れることの出来ないことです。まだ／＼申上げたこともありますが、時間も長くなりますから、大體この邊で終ります。

文化のデパート

森本茂雄

一、新聞減頁の波紋

新聞の妙味は往年のことを思へばかなり薄れてゐる。自由論壇華やかなりし頃が、やはり新聞の全盛時代だった。

しかし今次事變勃發以來新聞の國家に盡した功績といふものは、實に偉大なものである。戦争といふ荒い時代を推進して行く上に、新聞が如何に重大な役割を演ずるものであるかといふことは、今更吾人が喋々するまでもないことである。時代が荒ければ荒いほど、一層新聞の必要性を痛感するといふことは、我國の大新聞が、何れも戦争の度毎に膨れ上つて、發行部数が飛躍的に増加して来た徑路を振り返つても、容易にうなづけることである。ラジオが出来て以來、新聞の最も得意とする速報は成程減殺された。しかし新聞の記録的速報價値は、最も本質的なものであり、従つてこれに對抗し得る強力な相手がない限り、新聞の効用といふものは依然徹底的な影響を受けるものではない。

周知の如く我國の新聞は事變以來幾度か減頁を余儀なくされてゐる。昭和十二年度を基準とし、原紙の割當制限は強化される一方である。これは我々新聞人にとつては、容易ならぬことであつて、まさに死活の問題なのである。活字を小さくして段数を増加し、廣告面の縮小を圖るなど、今日の朝夕刊共八頁になるまでには幾多苦心の段階を経てゐる。見出しの縮小、寫眞や凸版の縮小制限など、編輯子の苦心は一通りではなかつた。そして今日の如き状態になつてつくづく思はれることは、果して日本の新聞「勿論一流新聞のこと」は何頁を以て適正とするかといふことである。おそろしく多くのニュースが氾濫し、

たゞさへ窮屈な思ひをしてゐる新聞に、まだこの上無秩序な制限はあり得ないであらうが、朝夕刊共計八頁といふことは我々が豫期した最後の段階である適正頁の算出は一概に出来るものではなく所詮生きもの、ニュースを扱ふのに、固定した基本頁を作ることと自體が既に無理だ。巷間やゝもすれば弱小新聞社から「新聞奉還論」や「原紙配給一率實施論」が唱へられたりする。しかし同じ様に、經營して来た仲間、今日の如き壓倒的な懸隔が生じたといふことは、決して偶然ではないのである。それに今に至つて流行らぬからといつて、徒らに時局便乗的な言辭を弄するといふことは、感心出来ぬ。原紙配給に就ても、假りに大小新聞一率に何割制限といふことになると、こたへるのは大新聞のみといふことになつて、不合理も甚だしいのである。

また或人は言ふ「日本の新聞は、皆似たり寄つたりの記事を掲げてゐる。だから二つ以上の新聞を讀むことは、殆んど不必要である。」と成程毎日と朝日が合併すれば、朝夕刊共計十六頁の新聞が出来るのは道理だ。しかし世人は考へてみるがよい。ニュース映畫が一本に統合されてからの低調さと、世人の關心の薄らいだことを。統合される前は同じやうな畫面と同じやうなアナウンスで、觀客はブツブツ云ひながらもニュース映畫館は何時も満員だった。然るに現在はどうだニュース映畫は映畫法に依つて強制上映されるだけで小品もの、文化映畫のための刺身のツマに過ぎないではないか。

統制は成程結構である。現在の新聞はこの統制から決して除外されてゐるものではない。統制されるべきことは十分統制され盡してゐるのである。ナチス張りの徹底した統制を以つてしても、ドイツの日刊新聞は三千餘りあるのである。それではドイツでは如何に統制されてゐるか。ドイツに觸れたから極く簡単に記しておかう。

ナチスが政權を獲得してからは、輿論を指導するため、新聞院といふものが設けられた、また宣傳省の内に新聞に關する一つの局が設けられて、専ら努力を新聞に集中したのである。そしてこゝで毎日「新聞會議」が開かれ、各新聞社の記者や、編輯局長が集り、記事に就いて研究することとなつてゐる。記者は政府の記者養成所を卒業した者を採用し、國家が身分を保證することになつてゐるのである。黨機關紙としては周知の如くフェルキツシャー・ペホバターがあつて、發行部数は約四十万となつてゐる。デヤ・アングリフも黨機關紙であるが、發行部数は十萬ぐらゐであらう。その他代表的なものは、重工業系の右翼紙ドイッチェ・アルゲマイネ・ツァイツングの六万五千、中産階級向の家庭紙ベルリナー・ロカール・アンツァイガーの二十万、それから發行部数は三万といふ僅少であるが、反ソ的でドイツの指導者階級に比較的愛讀されてゐるといふベルリナー・ベルゼン・ツァイツングなどがある。その他ベルリナー・ターゲブラット、ゲルマニア、ベルリナー・モルゲンポスト、ベルリナー・フォルクス・ツァイツング等があるが、何れも發行部数は少い。

フェルキツシャー・ペホバター紙は政府、乃至黨の直接、間接の力が加はつて發行部数は著しく増加してゐる。ハーケンクロイツを頭に戴き、フロントベージの朱のアンダーライン入り見出しは、派手好きのアメリカ新聞にも見られぬこの新聞の特色である。

二、編輯技術制約の限界

ともあれ我國の新聞は今度の減頁によつて編輯方針に重大な變化を遂げた。見出し活字の粉飾は、スペースをとるものとして追放されたが、こんなことぐらゐでは埒があかない。寫眞面積の縮小や見出し段数の縮

小制限も、とつきの前から實施されてゐる。さりとて基本活字のサイズも、現在の程度がヤマダ。要するに編輯技術の縮小時代はとつきの昔に過ぎ去つてゐるのである。次に來るものは記事内容の壓縮だが、これも今では随分壓縮されてゐる。試みにどの新聞を見ても記事のセンチンスは矢鱈に長い。「何々であるが、何々であるが、といふ具合に――」で續がることの長いこと。二息も三息も繼がぬと文章が切れない。かくの如く記事の壓縮も強化しやうがないといふところまで來てゐる。そこで次に考へられるものは、與へられた紙に最も新聞として必要な記事を重點的に優先せしめるといふことになる。編輯技術の工夫から編輯企畫へまで、對策の移行が見られるのである。かくなる上は、長つたらしい續きも、の讀みものは、姿を消すであらう。解説記事や評論ものも、制限乃至は没却されることゝならう。

廣告の收容面も必然的に減少した。從來の如く一行に付幾らといふ方法に、枠で幾らといふのが加味されたのだ。枠といふのは恰も國技館の棧敷の如く、一桝幾らといふ建前だ。

三、新聞屋から文化屋へ

一秒間に地球を七廻り半するといふ電波の速さは、ニュース戦線に大きな恐慌を齎らした。米國あたりでは今度の歐洲動亂に各社選りすぐりの記者を多數特派して所謂特種を漁らせてゐるが、先般の獨ソ開戦第一報の如く、ダイヤル一つ廻せばおながらにして電波がビツク・ニュースを傳へてくれるといふのだから、特派記者の至意報とは全く同日の談ではない。そこでこれは私のちよつとした思ひつきであるが、新聞社のラジオ兼業が日本にも出来るとしたらどうだらう。日本放送協會とは波長を變へて、紙面に收容し切れない廣告をラジオで放送するのだ。勿論聴取者は聴くと聴く

まいと御隨意で、聴取料はもとより取らない。専ら廣告放送の收入によつて賄ひ、聲優連は廣告の注文主らが勝手に雇つて來て時間制度に依る持時間を、あらゆる趣向を凝らして放送するといふ寸法だ。いはゞアメリカ式だが、主力を演藝に注ぎ、聴取者をひきつけるのである。ニュースは自らのスタッフで完全に賄ひ得るから放送協會のやうに同盟に頼ることを必要としない

ラジオの方は新考察であるが、大新聞が現在やつてゐる副業を一層強化するといふことも考へられる。無形の通信事業をはじめ出版、映畫に至るまで、凡そ手なづけて來た事業といふ事業は、片つ端から擴充する。新聞社が永年培つた信用とスタッフは實に強力なものであるから、これを基礎に多角計營をやるのである。通信網、販賣網の全國津々浦々に張り巡らされてゐることは、何といつても新聞社の隠然たる潜勢力であり、且は顯勢力でもある。これを土臺に派手な多角計營をやればよい。日本出版配給會社の統制外にある新聞販賣店、そこから讀者の手に直接齎される新聞社出版物の偉力を發揮し、世に比ひなき文化の浸透力を顯揚する。

一方映畫の方面ではニュース映畫が日本映畫社に統合されたといへ、文化映畫の製作はお構ひなしだから、この方面に鋭いセンスを盛つたものを世に提供する。これは現在でもかなり活潑に行はれつゝあるが、一層力を注いで記事で磨きのかゝつたセンスを企畫に盛る。

これを要するに筆者の思ひつきは新聞社をして、文化のデパートメントストアたらしめることである。云々新聞屋から文化屋になることである。

四、ニュース映畫と演出

ニュース映畫の低調振りは前にもちよつと觸れておいたが、日本のニュースカメラマンの總てとは云はぬ

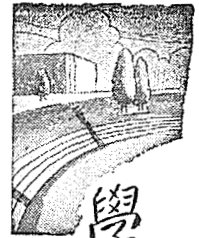
が、大部分は娛樂映畫から轉向した人々である。轉向と云へば聴えがよいが、實は中途で劇映畫を投げ出した牛端職人である。だからドイツのニュース映畫に見るやうな演出技巧は、日本のニュース映畫では見られない。劇映畫で一人前叩き込んだ腕をもつてせば、もつと奥行の深い、厚味のある作品が出来る筈である。初めからしまひまで鏡頭徹尾マクシ立てるアナウンスの御厄介になつて、云はゞ繪はつけたりの如く、アナウンスの表現を補助するといつた程度の描寫しか出来ないのは、彼等が全く演出と云ふ頭がないからである。アナウンスなどは聴かないでも、繪を見て居ればひとりでもわかるといつた巧妙な演出が、一本ぐらゐあつてもよきそうだが、これが期待出来ない。ガーガー唸るアナウンスの如きは、補足的役割を果すだけではないのである。

とにかくニュース映畫のカメラマンは、演出に欠けてゐるといふのが門外漢にまで喝破されるほど、どきどきと畫面に出てゐるのはたしかだ。しかしニュース映畫に演出は必要でないといふ云へばそれまでだ。成程寫眞を綴るのがニュース映畫の本領である。筆者が斯く云つたからといつて、芝居がかつた演出のとりとめもない誇張を期待するものではない。

ニュース映畫に演出を期待するのは、自ら一定の限界がある。一つの英雄の所作を映すにしても、カメラ・アングルを縦横に驅使して、表情の瞬間瞬間をキヤッチし、それを對照物と合せば藝術的なニュースも出てこようといふものである。ヒットラーの表情と、競技のテムボを巧妙に組合した「民族の祭典」は、このプロデュサーの成功であつた。

以上とりとめもない駄文を綴つたが、學報子の注文に應へて、敢て愚者の思ひつきを縁陰に贈る。

筆者は昭十一專二經、昭十四大法卒、大阪毎日新聞社勤務



學 內 報

夏 期 行 事 日 程

學 部	七月十日	授業開始	試 驗
學 科	七月廿日	九月五日	自七月四日 至同 七日
專 門 部 一 部	七月廿日	九月五日	自九月六日 至同 十日
專 門 部 二 部	七月廿日	九月五日	自九月六日 至同 十日

日 本 文 化 講 義

本年度専門部第一回文化講義は鴻池合資會社理事江崎政忠氏を講師として、大阪の古代文化に就いて、聴講、卒の通り行はれた。

専門部第一部

六月廿三日 月 午後一時—三時半 於天六學會

同 第二部

六月廿四日 火 午後六時半—八時 於天六學會

夏 期 語 學 講 習 會

第十九回夏期語學講習會は昨年の通り英語科、支那語科に分つて開催する事に決定した。

會期 七月十五日—八月七日 自午後六時至八時

場所 天六學會

講師

英語科 村上喜貞、水谷操一、片岡甚太郎 各教授
支那語科 車半定世、有馬隆之助、黃廷富 各講師

支 那 事 變 四 周 年 記 念 式

七月七日は支那事變四周年に當るので午前八時半より、千里山學會、天六學會に於て大々記念式を舉行、支那事變一周年に賜りたる物語捧讀後訓話があり、嚴肅裡に終了した。

研 究 發 表 機 關 擴 充

本學教授、助教を以て組織する關西大學學會は、研究發表機關として關西大學研究論集、法律政治、經濟商業、文學哲學の三篇三分冊を年一回發行してあるが、教授陣容の充實と共に教授、助教の發表機關としては回数その他に不備な點があるので、これが調査委員を各教科別にあげ調査研究を續けたり、最近その成案を得たが、これによれば法律政治、經濟商業、文學哲學に三分類されることは従來通りであるが、回數増加して一年に六々四回、四回、二回の割合に發行執筆者の範圍も擴張してその研究成果を發表する事になり、明新學年より實施の豫定である。なほ調査委員は左の通りであるが引續き調査研究を重ねる筈。

- ▽法文學部 安藤 光、木村隆助、武内省三
- ▽經濟學部 賀來俊一、瀧澤喜子雄、磯部喜一
- ▽大學豫科 村上喜貞、三枝福正道
- ▽専門部 正井敬次、矢口孝次郎、柳瀬兼助

研 究 論 集 第 十 一 號

執 筆 者 決 定

關西大學研究論集は明新學年度より擴充されるが、本年はその第十一號を來る十一月發行することとなり、執筆者は左の如く決定した。

- ◇法律・政治篇
- 安藤 光、岩崎卯一、川上敬造、木村隆助、中谷敬三、野村次夫、柳瀬兼助、吉田 稔、田口豐三、國

歳 胤 臣、福 島 四 郎、植 田 重 正

- 常務委員 安藤 光、柳瀬兼助、木村隆助
- ◇經濟・商業篇
- 神戸正雄、正井敬次、水谷操一、森川太郎、佐伯三郎、河村宜介、加藤金次郎、赤羽豊治郎
- 常務委員 加藤金次郎、三木純吉、三谷道麿

◇ 文 學 ・ 哲 學 篇

- 岡本勝治郎、賀來俊一、堀 正人、山田松太郎、安川安太郎、廣瀬捨三
- 常務委員 堀 正人、高橋盛孝、廣瀬捨三

學 生 勤 勞 報 國 隊

この程大選決定した興亞學生勤勞報國隊は七月十六日午前九時大阪發の「かもめ」で上京、七月十八日午後三時千葉縣下志津演習場に全國參加團員集合を終り、七月二十二日迄訓練を受けて同二十三日内地出發大體八月二十九日頃歸阪の豫定である。

なほ本學の參加者左の通り

- 講演班 責任者 河村勝久 同副 細谷龍郎
- 藤本勇、勝原睦夫、垣内恒夫、吉田利、田上定行
- 本井嘉幸、中原健吾、山川重彌
- 北支班 責任者 妹尾道雄 同副 久光幹男
- 幸原守也、豊越 震、中村博一、中尾重治、安井周夫、嶋田正之、鳥羽 勇、武内英雄

が く ほ う 抄

- ▽野村、八島、安川三教授——六月九日開催の關西私立大學々生理事會議に出席せられた。
- ▽大小島眞二教授——六月十八日大阪府廳で開催された府下大學高等生理事會議に出席。
- ▽田邊正義學生主事補——豫科學生課に勤務中とのこ臨時召集により六月二十六日八時天六京阪前出發入隊された。

校 友

藤天井に花を眺めて

秀麗會例會開催

秀麗會第六十一回例會を五月十八日午後六時半より星ヶ浦茶屋に於て開いた、たまの日曜といふのに午後は物凄く豪古風で、街行く紳士、淑女方の洋服や折角の盛装も頭から馬糞と砂ぼこりの洗禮を受けて何とも早や御氣の毒千万であつた。この風では……と出席率を心配したが「ヤアどうも遅くなりました」と且氏、續いてT氏と折柄の強風を衝いて續々集つて来る。大體頭敷が揃つた處で新人高階、永田兩君の自己紹介に初まり、ボツ／＼と牛鍋が始まる。酒が出る、ビールが出る、四方山話に處がはずむ、爆笑が起る。みんな時の移るのを忘れてゐるかのやうに見える。

當茶屋自慢の藤は満開に今一息といふ處である。藤天井も案外乙なものだがそれにしても藤の茶屋とはよく考へたものだといふ感じがたへない。近くの涯下に押寄せる怒濤、たれこめた眞黒な雨雲に水平線はぼやけて妖氣せまる光景であるが、藤の棚に吊された裸電燈で盤上漸く模範となり始めてもなかなか話は盡きない。そろ／＼引上げとなつて學歌高唱解散したときはもう九時をとうに過ぎてゐたし、怪しかつた空からはボツボツと何やら落ちて来た。

當日の出席者

- 高階 一三 永田 淺雄 高階 貞一 秀島 幸帝
- 小泊 六翁 川野 勳平 平井 三郎 荒川 彌一郎
- 池内 謙一 前川 嘉一郎 木村 滋 吉村 一雄
- 吉村 立朝 山下 三郎 萩原 博 松田 久雄
- 寺田 英治郎

朝鮮支部春季總會

四月十八日午後六時より、南山町銀月莊に於て朝鮮支部第十五回春季總會を開催、松本支部長病氣欠席の爲岡本顧問開會の辭を述べ、次いで野田幹事より、昭和十五年度庶務會計報告あり、役員改選に移る、松本支部長病氣辭任のため、岡本至徳氏満場一致を以て支部長に推戴された。

南本年より會務多忙の爲、副支部長、幹事長制度を設け、副支部長に、松田清氏、幹事長に、野田博氏よれん、推選さる。朝鮮支部も會員愈々増加し本年より益々發展の機運をたどりつゝあり、更に會の隆盛を計るため協議事項に移り、昭和十六年度會務計畫を議す。

今回は又更に、黒田、濱谷兩君の送別會を兼ね、兩氏を送る辭を岡本支部長述べ、兩氏より挨拶あり、懇親の宴に移る、遠く國境平北江界より北阿醇平氏の参加を見、宴は更に盛となる、尾原東成氏、曾根三郎氏の謠曲、更に桂定一氏の落語等自己紹介につれて、自慢の陰し藝が飛び出し、時局談や商賣談に、あちこちに話しに實が入る、記念寫眞を撮り、櫻花の午後九時三十分盛會裡に散會す、當日の出席者左記の通り。

- 岡本 至徳 崔 錫 松田 清 松村 作二
- 野田 博 出田 善男 岸本 忠雄 荻田 二郎
- 小松 勝馬 伊藤 國雄 田中 豊次 桂 定一
- 曾根 三郎 岡野 一郎 木原 安彦 尾原 東成
- 宮永 久良 村上 三政 黒田 一男 石崎 儀二
- 吉本 肇 吉本 洋 外村 治義 秋山 雪太
- 川島 通利 鈴木 勳 都築 泰一郎 中條 得一

報 國 團 彙 報

勤勞奉仕作業

例年行はれてゐる勤勞奉仕も報國團の結成と共にその修練部の事業となり、本年も夫々各報國團毎に舉行することになつたが、從來の學内清掃に留まらず食糧増産の一翼に協力することとなつた。

大學豫科では校舎東方の新グラウンド東南を開墾、これに麥、甘藷など栽培の豫定、期間は七月十二日よつ十四日までである。

又専門部第一部では全學的な奉仕作業のほか別に勤勞鍛鍊會を組織して、兵庫縣加東郡社町出水に七月十三日より十九日まで農事手傳並に研究に出かける

鍛鍊旅行決る

夏期休暇を利用して心身鍛鍊と集團訓練に當てるため、専門部一部、同二部では修練部の手により鍛鍊旅行を企圖し、その具體案を左の通り決定した。

専門部一部(山陰地方大山、出雲大社方面)

専門部二部(大江山縦走コース、七月十三日、十四日)

學級親陸旅行

専門部第一部、同第二部報國團修練部主催の下に各學級の親陸をはかる目的で學級旅行が六月中旬より第二學期にかけて行はれるが、最近までに行はれたものは次の通りである。

- ▽専門部第一部
- 六月十六日——經濟科三年 石山寺方面
- 六月二十五日——商業科三年 淡路洲本方面
- 六月三十日——法律科二年 仁川五箇山コース
- ▽専門部第二部

濱谷伊勢次 近藤 薫 牧 信尚 北岡 平
藤山 正巳 (順序不同)

支部長表彰さる

福岡支部祝賀會

六月十五日福岡支部では去る七日福岡辯護士會より表彰せられた池田支部長の表彰祝賀會を開催、多年にわたる同支部長の人權暢達の意圖と後進指導への盡瘁を賞讃して有意義に閉會した。

なほ同支部では大正六年支部結成以來二十五年の間支部長の職に在つて、本會の隆昌に盡力せられた同氏を、何等かの方法で表彰すべく協議中である。

第二十九回總會開催

大遷局内校友會

大阪逓信局内の關大校友會では去る四月十二日午後三時より戎橋電停前の北極星に於て第二十九回總會を開催、來賓の元會員、辯護士、岸本八策氏をはじめ會員四十七名の參集を得て盛大に舉行せられた。

宮城遙拜、皇軍將士に對する感謝の黙禱を捧げたのち、柿原幹事の挨拶に開會、大野幹事の司會により阿部會長の挨拶並に會務報告に次で北村幹事(大野幹事代理)の會計報告を終つて、濱路副會長を議長に推し議事に移り、元會長井上正臣氏を顧問に推薦、これに引續き役員の改選を行ひ、三木幹事の閉會の辭に五時閉會、直に懇親會に入り互に胸襟を開いて和氣藹々裡に七時解散、餘興として漫才を見物散會した。

新役員左の通りである。
會長 阿部 正一
副會長 柿原 拓

幹事 大野幸一郎 濱路 正久 三木 寛則

瓜田 英治 今井 繁 (以上第一區)

北村 實 門脇 多吉 松本久米一

(以上第二區) 後藤 達夫 友井伊三郎

(以上第三區) 土屋 昇 北原 明

石田 伊造 (以上第四區) 西井 大三

(第五區) 道光 充 (第六區)

柔道會 (專一柔道部出身)

六月十四日午後六時半より心齋橋筋森永に於て十六年度總會を開催、同じ學校に學び同じ柔道の道を歩んで來た者の集ひ、其の親しさの深さは又格別である、歸還勇士と新入會員を迎へて和氣藹々時の過ぐるも知らず。

新に會則を設け、本年より會費を毎年徴集し、出征軍人の慰問に、或は母校學友會が報國團と變り、其れに伴ふ柔道部々費の減額に對し援助する等を決議し九時閉會す。

當日の出席者は、渡邊 博、奥田甚一、藤田令允、中谷顯一、井上忠紀、安本丈夫、石村 巖、大西二郎、福島 弘

校友會常議員

武田 榮氏

明治三十六年本學專門部法律學科卒業者で校友會常議員、大毎監査役武田榮氏には去る六月十七日西宮市仁川清風荘の自宅に於て逝去せられた。

同氏は本學卒業後大阪毎日新聞社に入社、營業局長を経て昨年監査役に當選せられ、又、本學校友會常議員として校友會事業に盡瘁せられるところがあつた。

六月二十二日——經濟科一年 奈良市方面

七月六日——經濟科二年 猪名川コース

七月六、七日——經濟科三年 四國琴平方面

七月十二、十三日——國漢科三年 比良山の家

教養部研究發表會

新組織によつて綜合的研究に成果を擧げて來た専門部一部、同二部、教養部では、その發表會を第一部では七月五日午後一時より、第二部は同日七時より三階講堂に於て開催、レコード・コンサート・音楽部演奏などと共に多大の好評を受け無事終了した。

學内を整理美化

報國團の結成と共に生れた厚生部の手で學内生活を楽しく送らせるために、種々新設備が施され學内が美化されてある。

▽學部

學生課のクラブ・ハウス移轉につれて舊の同課を控室としてその美化運動が厚生部、美術部共同で考慮され、優秀な繪畫、寫眞、書などがこれを飾る豫定であるが、その外舊豫科校舍跡、威德館西方などにベンチを設置、學生の休息と野外の小集會にあてゐる。

▽専門部

學生控室(食堂)の南側に三間に一間半の藤棚を設け藤四本を移植、學生の休息にあてゐる外、控室に樹木鉢を入れ美化につとめてある。

尙志館を改造

舊學友會館を學長先生の御選名により尙志館と改名した。千里山兩報國團ではこれと同時に内部改造を計畫し現在の集合室の外、疊敷の室を設け又他の部分を共同部室として幾つかに區劃して各部の活動を容易ならしめる様に計られてゐる。

清 和 會

六月二十九日午後三時より志貴山、玉藏院地藏堂に於て清和會主催の下に學友故鈴木貞雄君(大正十四年專法出身)の慰靈祭を行つた。大抱陸呈幽温泉居士(鈴木君は毎年遺言書を作成し、自ら誓中に法名を定め置いた)の法名に故人の靈を祀り、未亡人信子様を主賓として同寺僧侶の讀經の下に追悼會を嚴修した。終つて五時半より最近戦地より飯還した竹林君の招宴に移り故人を偲び語り合ひ午後七時半散會した。

當日出席者 故鈴木貞雄君(大正一四專法)未亡人信子様、前田金吾(二四法)、前川信之助(同經)、竹林直信(同法)、鷹見文博(同經)、井上賢一(同商)、松田貞三郎(同經)、安田清治郎(同法)。

會 員 消 息

東 喜義 (昭九 專二經) 岸和田紡績會社より神奈川縣平塚市馬入字天沼、日本航空工業會社に轉職

畦地 啓郎 (昭四 專法) 朝日新聞社廣島支局より米子通信部主任に就任、住所は米子市東町四六

綾部 幸夫 (昭十二 大經) 新居濱市西新町一七三九に轉居

井手 俊介 (昭八 專二法) 今治市城山通に轉居

生駒幸次郎 (昭十四專二商) 東淀川區中津濱通一ノ九

鐘淵紡績會社中津工場染色科に勤務

内田 堅 (昭十三專一商) 新京特別市大同大街、滿洲生活必需品會社市場部經營課に勤務、住所は同市櫻木町四ノ三八、白雲莊三號

小川 弘法 (昭十五專二商) 遞信省屬に任官、管船局總務課より同局海務課に轉勤、住所は東京市杉並區高圓寺七ノ九八八篠田三郎方

藤 一裕 (昭十五專二經) 西宮市江上町一七、龍水園に轉居

大山 肇 (昭十六 大法) 朝鮮咸鏡北道廳地方課に勤務

面地 卓夫 (昭十四專一商) 宇和島市賀古町一五に轉居

木下大次郎 (昭十六專二商) 神戸市林田區蓮宮通一ノ五三に轉居

木船 信男 (昭十一 大法) 東京市中野區野方町二ノ一三三に轉居

木村由之助 (昭十五專二經) 三月二十五日入營

吳 健一 (昭十三專二法) 京城地方法院に勤務

小堀七五三夫 (昭十一專一經) 鳥取縣東伯郡上北條村下古川に轉居

小林儀三郎 (明四〇 法) 不動貯金銀行橫濱支店より大阪支店に轉勤、住所は西宮市相生町一八

佐久間辰二 (推) 福井地方裁判所長を辭し桑名市大字外堀に轉居

鮫島 正弘 (昭十六 大法) 東京市澁谷區大和田町九二、補徳次郎方

繁本 明 (昭十六 大經) 朝鮮羅津府昭和通國際ビル内、滿洲特産專管會社羅津事務所に勤務

島田 忠和 (昭八 專二法) 丸福ゴム工業會社々長、住所は住吉區天王寺町三三八七ノ一

新名 馨 (昭十二專二法) 九日除隊、住所は従来の此花區四貫島德平町一ノ一

新名 武男 (昭十六專一商) 廣島鐵道局倉敷貨物掛に勤務、住所は岡山市下石井七六

杉浦 健一 (昭十三專二商) 應召解除、藤本ビルプロカー證券會社古屋支店に勤務

炭村 寛 (昭九 專法) 元山府京町四七ノ一に轉居

綠化基金寄贈

本年度第二豫科修了者中C組を以て組織してある有聲會では、今回豫科修了記念として貳百圓を圖書室備品(陳列箱)及び綠化基金として代表者を通じ學生課に寄贈された。

排球コート完成

報國團體線部内に本學特異の班として輝いてゐる豫科排球班は、昭和十五年度在學生一同の贈金に依り購入せられた道具一式を以て排球コート一面を設置する事となり、先般來工事にかけつておたところ、このほど殆ど完成を見た。

植樹を寄贈

本年度第二豫科終了者吉田修之君より綠化材料としてドラセナ十五本を單獨で寄贈せられた。

學生々活完遂

學風振興を決議

報國團の結成と共に學生の動き方には著しい變化が現れて來た、専門部第一部では學生課から(一)長髮禁止(二)替ズボン、和服着用禁止(三)喫煙場所制限の三項を揭示して學生の反省を促すと共に報國團幹事の協力により學風振興をはからんとし、専門部第二部では幹事總會に於て學生々活の徹底的完遂を提議、(一)學生たるの禮度把持(二)禮節尊重(三)學徒たるの耐氣涵養などを決議して、夜間部學生たる特殊性の如何を問はず學生の本分に相異なしとの意見開陳があつた。

なほ豫科では週番制を實施して學内禁止事項の遵守に相當の成績を擧げてゐる。

岡谷 宣 (昭十四專一商) 廣島市土柳町四九、湖内方

田畑 留七 (天四 專商) 吳羽紡績會社錦工場に勤務の處、富山縣下新川郡入善町入善工場に轉勤

高見 秀雄 (昭十三專二法) 神戸市須磨區平田町一ノ一二に轉居

橋 寛 (昭十三專二商) 東區大手前之町二、國民會館に勤務

棚池 信一 (昭十五 專四) 神戸市灘區上河原通一ノ八に轉勤

谷 光倫 (昭十五 大法) 港區香妻町三ノ一〇八に轉居

玉城 安吉 (昭十五 大法) 四月一日入營

辻 實 (昭十三專二法) 鹽田と改姓、姫路市元鹽町一七に轉居、三越大阪支店より同神戸支店に勤務

筒井 榮一 (昭八 大法) 港區市岡元町三ノ一に轉居、大阪市電氣局高速鐵道部より同購買課に轉勤

戸田 正視 (昭十五專二法) 松山市東一萬町八五、和田福次郎方に轉居

中村 俊滋 (昭十 大法) 西宮市外甲子園日東通一七五に轉居

中村 武雄 (昭三 專法) 神戸市灘區青谷町四ノ五五二ノ一八

西村 勝 (昭四 大經) 本學豫科學生課に勤務

野坂 眞三 (大十五 專法) 臺灣總督府殖産局より同米穀局大阪米穀事務所長に轉任、住所は伊丹市新伊丹五九一

橋谷 末吉 (昭十三專二商) 北區堂島上三ノ八、日本金屬製品輸出組合本部に勤務、住所は東淀川區國次町一七二ノ二

長谷川 隆 (昭六 專經) 上海福和司公より東京市麹町區内幸町放送會館内、東亞放送協議會事務所に勤務

濱田 利治、(昭一 專法) 山口縣熊野郡上關に轉居

早田 孟生 (昭十二 大經) 東京發動機會社に勤務、住所は東京市杉並區和田本町一〇八一

番田 開輔 (昭十二專二商) 山口縣小野田市大字有軌角石に轉居

平尾隆太郎 (昭十三專二法) 堯英と改名、澁町保線事務所より通 區區に勤務

平田 元藏 (昭十四專二法) 奥野と改姓、吹田市西之庄町四五九に轉居

廣田 孝二 (昭八 專二商) 和歌山市南材本町一〇八に轉居

深尾 弘 (昭十三專二法) 内務省警保局外事課より余妻室に轉勤、住所は東京市赤坂區善山北町四ノ四

福島 弘 (昭十六專二商) 西淀川町海老江中三ノ八一、高橋元義商店に勤務、同店に住居

藤田 令允 (昭九 專二法) 山田電氣會社を辭し、同盟通信社に勤務

藤野末五郎 (昭十五 大法) 忠清北道清州郡梧倉田面場登里に勤務

舟渡與三松 (昭四 專法) 中津署より北河内郡津田署に轉勤

前野 正晴 (昭十四 專法) 横濱市仲區辨天町一ノ五日本毛布ヲナル組合出張所に勤務

松井二三夫 (昭十 專二法) 入隊

松本 義真 (昭十五專二法) 吹田市豐津、谷日齊方に轉居

三橋 龍一 (昭五 大經) 鐵道生計組合仕入課に勤務、住所は奉天市松島町同總局第二別館内、同課

南 富雄 (昭十六專二商) 愛媛縣新居濱市金子、成實寮に轉居

宮崎 捨勇 (昭四 專法) 西淀川區元本町四八一、村上吉三郎 (昭九 專二商) 朝鮮黃海道鐵道郡西洞面新換種里に轉居、金融組合理事に就任

村山 早苗 (昭十六專二法) 東京市澁谷區橋ヶ谷本町三ノ五二五に轉居

森 皎 (天十一 專法) 陸軍保險手倉出張所より愛媛縣健康保險課長に轉任

學部教化講演

關精拙師の坐禪儀提唱

七月二日午後一時半より千里山學舍鐵道館に於て天龍寺貫主、關精拙老師の提唱及び同寺和尚、山田無文師の來禪指導を學部國團數教養部教化部の主催により第一回教化講演として開催、多數出席の眞摯な學生に於ての尊さと「禪」の秘趣に就いて多大の感銘を與へるところがあつた。

電氣蓄音器を購入

專門部、二部、國團

學生の精進教育の資として專門部第一部、同第二部の兩部國團共同で先輩大野孝三郎氏の斡旋により電氣蓄音器を購入レコード・コンカート其他に利用せらる。

中等生へ自動車講習會

學部 自動車部

岸國團と同時に生れた學部自動車部は八月廿四日より三十日まで、東淀川區十三のナニ、自動車練習場にて府下男女中等學校生徒に講習會を開催するが、参加人員三十名である。

支那臺灣四周年記念

軍事訓練を實施

三射擊部參加

日本學生射擊聯盟關西支部主催の支那臺灣四周年記念事業としての軍事訓練に六月廿日夜より七月一日拂曉にかけて舉行せられたが、本學學部、豫科、專門部第一部の各射擊部は之に参加、行軍、夜間射擊、突撃、銃訓練を實施午前五時三十五分解散した。

森中 隆三 (昭十六 大法) 旭區縣小路町五ノ二五
 山内 弘吉 (昭十五 大法) 山本と改姓、南河内郡大
 草村大葉野三ノ三に轉居
 山口 清 (昭十二 憲法) 滿洲國奉天省昌圖縣、滿
 洲開拓青年義勇隊昌圖特別訓練所官野中隊本部勤務
 山崎 治 (昭十二 憲法) 新京治安部軍政司法務課
 に奉職
 山下 義太 (昭十二 憲法) 臺灣高雄市八幡部隊入隊
 山田 練一 (昭十 大法) 名古屋市中川區牛田通三
 ノ二に轉居
 山中 信大 (昭九 憲法) 熱河稅務監督署より滿洲
 國官吏演習聯合會聯合會に轉勤
 山本正太郎 (昭十四 憲法) 西宮市仁川、西原信房方
 山本彌三郎 (昭四 憲法) 三和銀行大瀨橋支店より
 福岡市上英服町、同行瀨崎支店に轉勤
 宮本 福治 (昭十六 憲法) 廣島縣田原に勤務、北區
 幸島中ノノ三八に轉居
 和田南吉男 (昭四 憲法) 八幡濱市、愛媛縣通稱八
 幡濱共同販賣所々長に就任

各報國團部内部

夏季鍛鍊計畫

射擊部 七月十五日、廿一日、
 射擊訓練大會 戸西學校。九月、日、
 七日、和歌山に合宿訓練。
 自動車部 七月十六日、廿一日、附
 暑並に外來訓練。同廿五日、八月八日
 トロタ自動車講習會に參加。八月廿四
 日、十日、中學校生徒講習會開催。
 馬術部 七月十五日、廿四日、
 徳島に合宿、八月廿五日、九月十日、
 北海道日高市種馬所、青森市種馬牧
 場に見學旅行。
 拳法部 七月十五日、廿二日、
 兵庫縣龍野武徳殿に合宿訓練。
 道部 七月十六日、十八日、
 高専大會(京大道場)。七月下旬、青年
 演武大會(京都武徳殿)。八月下旬、九

逝去

山口直市 (七十一 憲法) 四月十一日逝去
 大前金一 (昭十五 憲法) 五月十七日逝去
 加藤大十 (昭十五 憲法) 二月九日逝去
 田島政雄 (昭八 憲法) 四月十二日逝去
 高見久 (昭十五 憲法) 四月十六日逝去
 納富利夫 (昭十六 憲法) 大阪女子醫專附屬病院に
 て療養中五月十四日午後八時三十分逝去、遺族は佐
 賀縣杵島郡大明町、許島炭坑社宅、納富貞行方
 山口正勝 (昭七 大法) 昭和十三年十二月入隊出
 征中の處本年三月二十八日壯烈なる戦死を遂ぐ

改姓名

大八 專經 池田 正信
 昭入 專二法 池田 正信
 昭十二 專二法 平尾 隆太郎
 昭十三 專二法 山内 弘吉
 昭十四 專二法 山内 弘吉
 昭十五 大經 山内 弘吉

高田博士担当

經濟研究部特別講座

專門部第二部經濟研究部の主催による第一回特別講
 外講座は七月八日午後七時より大六學舎三階大集會室
 に開催、京大教授高田博士を招聘、物價問題につ
 いて講演を拜聴、ついで懇談會を開催した。

學部役員の修鍊

宇治黄蘗山に參禪

學部國團修練部では七月十、十一日の二日間にも
 たり宇治黄蘗山に國團役員的心身鍛鍊を行つたが、
 先づ十日桃山御陵に參拜後、黄蘗山に宿泊、禪の講習
 を受けた。

專門部で献金を募集

支那軍閥記念日事業

七月七日專門部第一部、第二部では威風な武典の後
 登校學生に奉還記念献金を募集、續々と行列を爲す程
 であつた。

月上旬、徳島に合宿訓練。

水上競技部 七月十四日より十日間
 市立第七商業に指導者派遣。
 壘球部 八月廿七日、九月七日
 松山に合宿練習(導一)合同。
 音楽部 七月十五日、廿五日、
 淡輪に合宿練習。
 專門部第一部
 柔道部 七月十四日より一週間
 京都武徳殿に合宿訓練、全國高専大會
 出場。
 剣道部 七月十二日、十八日、
 高野山に合宿訓練、全國高専大會並に
 全國青年演武大會に出場。
 弓道部 七月六日、十八日、武
 徳會滋賀支部道場に合宿訓練。七月十
 六日、十八日、全國高専大會に出場。
 相撲部 八月五日、廿四日、四
 國今治に合宿訓練。八月廿六日、九月

五月、千里山道場に練習。

五月、千里山道場に練習。九月六、七
 日、全國學生相撲大會に出場 學部
 合同。
 拳法部 七月十五日、廿四日、
 明石中學に合宿訓練。
 杖球部 七月十二日、廿日、奈
 良に合宿訓練。七月十九、廿日、高専
 大會に關西代表として出場。
 ソクビー部 九月、日、十日、奈良
 春日野グラウンドに合宿訓練。九月六日、
 對大阪鐵道局戦。奈良。同十四日、對
 關學戰。甲子園。
 陸上競技部 八月廿日、十日、合宿
 訓練。場所未定。
 蹴球部 八月下旬より十日間、
 合宿訓練。場所未定。
 庭球部 七月八日より一週間、
 中百舌島、トトに合宿訓練。七月十六
 日、廿五日、奈良木庭球選手権大會
 中百舌島、トト。八月五日、十四日

全日本學生庭球選手権大會

全日本學生庭球選手権大會(東京、
 八月廿日、十日、全日本庭球選手権大
 會)に出場。
 山岳部 七月十五日、廿四日、
 後立山鐵道を計畫。
 柔道部 七月廿日、廿九日、土
 用稽古。
 剣道部 七月十九日、高専大會
 京大道場。同廿日、全國青年演武大
 會(京都武徳殿)に出場。
 ソクビー部 七月十二日より、淀川
 公園に練習。八月廿日より、合宿訓練
 の豫定。
 講演部 七月下旬、淡路湖本に、
 八月中旬、布施市に遊説。
 商業研究會 七月十二、三日、神室
 山寺に、酒座談會。十二日、朝日新聞
 大阪本社見學。

學徒の體練

日本五種競技

西村 勝

萬邦無比の我が國體に關り、高度國防國家要請の時局下に青年學徒が眞剣な體鍛と果敢な精神力を涵養する觀點から、最近國防訓練の新種目として五種競技が創始され、之が實施をみるに至つた。

今日では興味本位の、又個人的記録向上のみを目標とする競技の相當部門に終止符を打たれ、全體主義的な集團競技が唱導されてをり、既に着々偉效を奏してゐる。青年學校の國防體育訓練競技の如きはその代表的なものとして世人の注目を惹いて來た。

こゝに紹介する新五種競技は、曾ての第五回國際オリンピッククーストツクホルム大會から競技種目に加へられた近代五種競技を基礎として巧みに日本化されたものであるが、オリンピック大會での此の近代五種競技は、クルメルタン男の提案によるものであり、在來の運動競技と軍隊訓練との緊密な連繫を圖るもので、該種目の行はれるや着々好結果を産み、兵士の鍊成に大きな收獲をみたのであつた。さて今後實施される日本五種競技は綜合體鍊として如何なるものか、之に先立つて競技者の適、不適、更に鍛鍊の方法並に各制競技に就ての練磨方法などは未

だ決定的なものでなく、從て多くの研究課題が残されてゐる譯であるが、こゝでは極く簡単に五種競技に就いて解説し諸彦の御參考に供する。

一言に云へば綜合競技で馬術、射撃、水泳、競走、劍道の五種目を同一人選手が規定の型、方法、服装を以て、技を競ひ得点を合計して優勝者を決めるのである。

一、馬術競技 不齊地騎乘並に障礙飛越の双方を行ふもので、此距離千米、その間一米内外の高さの障礙物十個を三分以内に飛越走破するもので、此場合規定時間の三分を超過した時、一秒に就いて一點を減點せられ、四分以上超過の際は爾後競技に對し失權となる。尙この上に障礙飛越の失策減點を除いた點が加へられて、選士の得點が決定される。各競技共一千點萬點である。

二、射撃競技 使用銃は三八式歩兵銃で、距離二百米、標的は黒色十圓的、伏射である。射法は、試射各回二發、本射五發、連續射撃二回で、限秒は試射各發裝填とも一分、本射は裝填後二分とし、一千點萬點で十點あたれば百點、二十點あたれば二百點、百點あたれば一千點となるのである。

三、水泳競技 自由型で行ふ距離二百米の競泳で、タイム・レースの形式で行はれるが、この採點法は日本水上競技聯

盟公認の日本最高記録(現在二分九秒六)を滿點とし、これより一秒を超過する毎に三點を減じて採點するのである。

四、陸上競技 大體に於て距離二千米の斷郊競走を根幹とするもので、之は特に測定した凹凸のある地形を巧みに取り入れてある。採點の方法はトラックに於ける日本陸上競技聯盟公認の日本最高記録(現在五分五二秒)を滿點とし、一秒を超過する毎に二點を減ずることになる。

五、劍道競技 これは一本勝負、勝ち残り式で第一回戦の敗者に五百點、第二回戦出場者六百點、第三回出場者七百點、準優勝出場者八百點、準優勝者九百點とし優勝者には滿點を興へる事になる。

各競技の素描は右の通りであるが、進行の順序は、射撃、水上、劍道を以て第一日競技とし、第二日に馬術と陸上を行ふ事になるらしい。

彙述の如くオリンピック近代五種競技を日本化して、皇國の武道的精神を還元せんとする全く斬新な且つ重大な使命を有つた競技であるから、國軍當局の指導を初めとして文教の府が將來、力齎を入れる事は明かに豫想される。

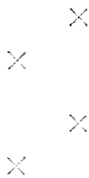
而し只今では差當り自馬醫畜校の學生が此の新競技を展開するもので、一般學徒としては少し近付き難い感が無いでもない。然し最近の體育訓練の水準が一と昔に較べ餘程飛躍してゐる事と

國防國定に對する若人の驚くべき熱意を以てせば、豫想外早く此の新競技も普及し、記録的に向上するものと考へられる。

吾が關西大學が大學・高專の覇者として、傳統的に體育競技界に不拔の地歩を占めてゐる事は今更喋々を要せぬが、若き學徒が體鍊競技を通じて國防的訓練に徹底し、併せて眞學敢闘の精神を養成するために、逸早くかうした新種競技の分野に進んで欲しいものがある。

戰時體制が長期に及ぶ皇國の學徒としては國防國家に寄與し得る、體軀と又個人として熾烈な攻撃精神、堅忍不拔の意氣とを養成しなければならぬ。すでに關西大學では報國團を結成して眞劍に計畫され、實踐されてゐる。世紀の轉換期に當面してこの組織の成果が學園に刷新的爽風を送るものと思はれ、又今後と雖も從來の各種競技が夫々の特性を生かして大いに體鍊に役立つ事は無論であるが、總括するまでもなく國防訓練の要請は今後量的、質的共に向上する情勢にあり、旺盛なる學徒の國防訓練の研究と練磨が一段と有望される次第である。

一筆書は昭四大學卒、水産資料勤務



校 友 會 費 拂 込 者 氏 名 (其 之 三)

昭 和 十 六 年 七 月 八 年 度 會 費

昭 和 十 七 年 度 會 費

昭 和 十 六 年 度 會 費

小野幾太郎	沼岡 力雄	清成五六郎	山下 重彦	柴田 信治	阿野 衛士	小倉 清助	林 忠三郎	西本 寛一	泉 春夫	深田 丈夫	木村 定雄	大西 正平	三村 五郎	皆木 鐵夫	前田 正利	紙谷 久善	熊野 猛	森田 利雄	坂本 龍夫	榮根 武夫	高野 時治	川端 保一	堀毛 清	堀 靖彦	杉岡喜治郎	野村 順三										
中澤 善夫	野間 豊	名越民次郎	八田 滋	小柳 光雄	高橋徳太郎	馬淵 一男	津村 雄吾	吉松 寛彦	藤田 茂	西田 義介	米井 邦三	小椋義三郎	矢野 義一	田中 義一	那須 旭	安藤 雄	平井 清	白川千代治	戸澤 英一	野村 末吉	一木 正光	戸臺巳之助	室山宇太郎	津田 藤雄	岸木 忠雄											
阿野 悦雄	大崎萬太郎	堀本 賢俊	森田文一郎	豊田 嘉彦	新海 泰三	意島 大郎	白髮 茂	塩谷 三郎	本宮 久吉	和氣 正之	山地 文雄	中村 簡吉	脇田 道邦	馬場 五郎	岡島 峯藏	多羅尾敏夫	兵三新太郎	鈴木 良助	中村 行巳	田中 明治	名倉 熊藏	大澤榮三郎	角野 秋二	唄 彌一郎	三木 英次											
加納多々雄	原口 孟	泉 隆三	竹内 正治	田村 春高	松木 鐵三	中山 秀次	佐藤 真行	西田 亮哉	高井 義衛	生田 準	荒川 正明	玉井 磨輔	和田 正節	和田 貞一	小曳 陽一	永井子之助	谷田壽十郎	千原 清治	辻 勝一郎	紀乃 薫	杉本 信夫	寺島平太郎	寺島平太郎	寺島平太郎	寺島平太郎											
木村平三郎	廣田 弘懸	石田幹太郎	吉崎 延一	井上 欣助	小川 成雄	村上 善	服部 覺助	上羽 正七	福井 真一	千足 耕造	岩窪 一雄	中務 平吉	西村 孝男	白井 種雄	山越 外吉	岡崎 信夫	黒田 一男	桂 定一	井口 圭司	小野 規幸	塩田 好一	上田 利夫	豊島 寅雄	松山 原盛	岩瀬 歳元	福尾 好雄	岡田 譽利	大塚 重延	楠島 信一	小倉 正雄	福島 勇					
田村繼大郎	大原 篤	白井 敬叟	藤田 正明	石黒 純	大塚順三郎	仙波 種春	多治見眞孝	萩崎幸太郎	奥西 茂樹	六村卯三郎	小倉 良造	山本淺太郎	小林 仙一	井塚 吉雄	田中 又三	橋本 義雄	黒田 美男	田原 孝	松浦 孝	澤田 勇夫	平井 重信	小川 弘法	丹羽宇三郎	山本富久治	東向泰三郎	長澤 健一	菅俣卯一郎	安福 文雄	吉田 正治	多田 米藏	板垣 進吾					
堤林 謙受	淺井 明	岡本四郎九	飯田 昇	大田 敏雄	大槻 信保	田中 誠逸	藤木不二夫	萩崎幸太郎	小西 文雄	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎			
山下喜代志	重田 政次	金原 功	笹田 英男	菅見 幸雄	廣瀬 實	酒井 勲	松島武三郎	藤井 卓平	野島清次郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎	菅野 三郎				
大畑 只一	武久 泰正	西川 七三	好田 磯一	朝田 良一	北島 一郎	山村 茂	兒玉 善吉	今泉 貞夫	田中 久雄	萩原 光三	森田 滿茂	北村 重作	安城 俊一	領内正太郎	加古撤次郎	松下 克巳	長手 米吉	太田 正春	山本 實	前田 實雄	近藤 常吉	小笠原延彌	本龍 正隆	野々村 弘	柳川茂十郎	松本標四郎	石丸 辰藏	井家 莊吉	深井新之助	平井 光一	丸山喜三造	城 榮五	安田 吉毅	森本 茂雄	井村 宗次	松阪 太郎

(以下次號)

關西大學
教授

森川太郎著

八列五判
價三三〇
四

銀行職能論

◇ 經濟特殊研究叢書第八編 ◇

經濟に對して銀行の營む職能を明確ならしむることは、即ち今日に於ける金融經濟の動きの核心を把握することである。本書は、著者が數年に亘る勞作を通じ、此課題に決定的解答を與へんとし、て成りしもの、金融理論の異説多き諸問題は、茲に整然と解説せられて餘蘊無きに近い。確かに金融乃至經濟理論に對する一つの新しい寄與たると同時に、通貨、貯蓄、物價、生産力擴充等我國現下の實際的諸問題に對しても亦、含蓄と示唆に富む好著たるを失はぬであらう。

再版出來

昭和十六年七月十五日發行 關西大學學報第九十一號

神戸商大教授
經濟學博士

丸谷喜市著

八列五判
價三〇〇
四

價值及價格研究班

◇ 經濟特殊研究叢書第九編 ◇

著葉の言葉——經濟者と經濟現象との心はいふ専ら政策乃至實踐の問題に向けられてゐる。時代の潮が極めて急速かつ雄大に動くとき、之は當然のことと思ふ。それにつけても基礎的、理論的研究は一日も忽にすべきではない。

私見に依れば經濟諸現象の根本的解明は「主觀主義」に立脚することに依つて初めて可能である。但し主觀學派の成し遂げたことは實はたアルプアであつて決してオメガではない。之を経験科學の體系にまで築き上げることが我々に殘された課題ではないかと思ふ。

最新刊

株式會社

大 同 書 院

東京駿河臺中央大學前
電話 振東 一八二一三八番
電話 神田 二二二八番

大阪 北區 一三番
大阪 北區 一三五番
大阪 北區 一三五番
大阪 北區 一三五番
大阪 北區 一三五番